

接続詞としてのナノデ

ミシガン州立大学

ハドソン遠藤陸子

1. はじめに

最近インターネット上に、例1のような接続詞（自立語）としてのナノデがよく現れる。本発表ではこのような文頭に現れるナノデをSweetser (1990) およびメイナード (2000) の枠組みで分析する。主なデータは2007年5月24日に検索した上位150件で、教育、機械、料理関係などのHP、大人・子供用ブログなど様々なサイトから得た。

(1) a. 「コカコーラの成分について」 - Yahoo!知恵袋 (12/25/06)

断固秘密にして永遠に作り方を独占するという方法で保護しています。なので作り方を知っているのはコカコーラ社長と専属弁護士のみです。なのでここで質問してもきちんとした答えは絶対にでませんよ。

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail.php?qid=1110336701

b. 「Communication: みんなのお便りをみてみよう」

色々な事がわかって楽しかったです。これからも見まーす。なので知らない事いっぱい教えて下さい。ぷっちょちゃん(10) www.so-net.ne.jp/kagaku/comu/main_i_08.html

2. ノデとカラ

接続助詞（附属語）のノデとカラの差違については古くから以下のように言われている。前件が原因・理由、後件が結果の関係にあることが「だれの目にも当然と思われるような場合」にはノデ、その関係が「話し手の主観的判断」の場合にはカラで示され、一般的に、「ノデのほうが丁寧だ」と感じられる（浅見1964: 295-297）。接続詞のナノデとダカラの差異は、これに通じる部分もあるが、当てはまらない部分もある。矢澤 (2004: 44-46) によると、(ナノデは) インターネットで検索すると用例がヒットするが、小説や新聞のデータで検索するとほとんどヒットしない；話し言葉では徐々に使われてきているが、文章語としてはまだ定着していない；「だから」では、理由をゴり押しする感じがするが、「ですから」では、畏まり過ぎるか気取り過ぎる、というので、「なので」の出番になったのだろう。また、「ことばおじさん」(梅津 2004) では「『なので』は...柔らかく聞こえ...そのため女性が好んで使う言葉なのだろう」と解説している。この外、例2にあるように、多くのサイトでナノデの接続詞的用法についての解説、使用の是非についての議論がなされているが、面白いことに上記の矢澤氏、梅津氏の解説と概ね一致している。

(2) a. 教えて！goo 「なのでの使い方」 (03/28/03)

小5の子供の作文を読んでいてスッキリしないことがあります。「○○○○でした。なのでこれからは○○○○しようと思います。」という文章を書きます。『なので』がひっかかるのですが、このサイトの回答を読んでも同じ使い方の文を見かけるので、このような使い方もあるの

かなとも思います。

回答日時 (04/25/03) 回答者 : puni2 どんな人 : 一般人 自信 : 参考意見

「なので」も「だから」と同様に、今後認知されていく可能性はあると思います。ただ、少なくとも今日の時点では、文頭の「なので」は、話し言葉ではありうるとしても、書き言葉にはあまり似つかわしくないように感じられます。文法的に間違いというわけではないと思うのですが、いわば慣習としてそうなっている、ということなのでしょうかね。

<http://bshieigo.com/entry/20090331.html> とば考] (09/15/05)

『言語は生き物』そうは言っても通過地点毎に正解はあるわけです。とりあえず、現段階では私は接続詞の“なので”は吸収したくないし、染まりたくない。

<http://plaza.rakuten.co.jp/CUTEliving/diary/200509150000/>

3. 考察

Sweetser (1990:76-82) は因果関係を表す接続を3種に分けている：(a) 内容的接続（現実世界での原因作用）；(b) 認知的接続（前件の情報から、結果は後件であると推論する）；(c) 言語行為的接続（前件の事実から、後件を尋ねる）なお、これはSchiffrin's (1987)の「事実、知識、行為に基づく因果関係」にも通じる所がある。接続詞のナノデのデータを分析すると、「内容的接続」を表すものが圧倒的多数で、「言語行為的接続」を表す用例も現れるが、「認知的接続」を表す用例は見当たらなかった。ダカラの調査でも同様の結果が出たが、これは(b)の接続が実際の言語使用でも例外的なためと見なされる。

同じデータをメイナード(2000)の「場交渉論」の観点から分析すると、「認知の場」では「個体認知、命題構成」に関与せず、「情報の交渉」もない。「表現の場」では「気取り過ぎもせず、押し付けがましくもない表現をしたい」という「情的・対他的態度」を表明する。「相互行為の場」では、相手の文章理解を助長し、後件に現れる描写、意見表明、依頼等の「参加行為」を管理する。

筆者が2006-07年に収録したデータ（母語・非母語話者、老若男女38名参加、計約8時間）では、接続詞としてのナノデは対話には全く現れず、ある大学のゼミでの発表者が使った1件のみである。今回検索されたナノデの使用状況からも、インターネット言語が純粋な意味での「話し言葉」でも「書き言葉」でもなく、その中間に属する独特のスタイルであるということを再認識させられる。

参考文献

浅見 徹「カラとノデ」（1964）時枝誠記・遠藤嘉基監修『講座現代語第六巻：口語文法の問題点』293-298
明治書院

梅津正樹（2004）「ことばおじさんの気になることば：なんでなのでなの？」(10/08/04)

<http://www.nhk.or.jp/a-room/kininaru/2004/10/1008.html>

メイナード・泉子（2000）『情意の言語学』くろしお

矢澤真人「なので」（2004）北原保雄編者『問題な日本語』293-298 大修館

Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sweetser, E. E. 1990. *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. New York: Cambridge University Press.